

方に横はりて南海を抱き、大板橋の港はその灣内に在つて、北斗に象る七星礁は、西南の海中に星を縷めたるが如し、東方なる紅島嶼は水煙茫茫、遠く模糊の間に在り、頭を廻らして背後の連山を顧れば、棕櫚に似たる檳榔樹、鳳梨の如き林投樹など、峯にも谷にも累々として果實を聯ね、翠綠滴るばかりなる光景、歐米人をして、あゝ美麗島と叫ばしめたるも宜なりと思はしむ。

既に北部より南部を一週して、臺灣全島を觀たり、而して尙ほ逸すべからざるもの一あり、澎湖列島これ也、此島は澎湖、漁翁、白砂の三大島と外に數十の小嶼を合して成り、支那大陸と臺灣とを連結する樞要の陸片なり、丘上に一樹一河なく、滿目唯だ荒涼たりと雖も、制海の便よりすれば、實に我が南門の鎖鑰にして、臺灣海峡の心臓部たる要害地なり、隨つて、列島の首府たる馬公城は、清國康熙十五年の建築にして、四方に城

壁を繞らし、市街はその中に在り、明治十七年清佛戰役の際、佛國水師提督クールペーは、先づ此の港を占領して根據地となしき、次いで明治二十七年、日清戰爭の際も我軍旅順威海衛を陥るゝや、比志島大佐の一枝隊を此島に派遣して之を占領したり、當時比志島枝隊は松島、橋立、嚴島、吉野、浪速、秋津洲、高千穂及び西京丸の七艦一船に護送せられて先づ澎湖本島の東端なる裏正角に上陸し、政廳を占領して民政を布き、和成るに及んで我有に歸したるは、尙ほ讀者の記憶に新たなる所ならん、當時我が上陸軍は、風土に慣れざる爲に、疫癘に罹りて死する者千人に上りき、今馬公城外に二丈餘の大碑石あり、是等病死者が埋骨の紀念なるが、稱して千人塚といふ、また訪ふて弔ふべき也。

恚くて臺灣の巡覽を終りぬ、之より我が最新領地たる朝鮮に渡行して、これが史蹟を討ねん乎。

其十五 朝鮮諸道

◎日韓の歴史的關係

高價なる新領土——大陸に架する橋梁——失敗の教訓——橋梁としての朝鮮の價值——失名の大策士佐田白茅——福澤翁の大活眼——合邦案の最善策——入念過ぎたる御分別

古來我同胞國たりし朝鮮八道は、今や新に合併し、日章旗の下に於て彼我の別なきに至りぬ。蓋し千年以來今日に到る迄、日本は朝鮮に對して實に容易ならざる血税を拂はせられたり、遠くは神功皇后豐太閤の征韓、近くは日清日露の兩役を経て、漸く今日に至りしと雖も、其間幾億の軍費と幾十萬の生靈とを犠牲にして尙且つ足らざらんとす。高價と云へば法外の高價なり、恰も道樂息子に對する親父の如く、彼の幼稚な

る新國民を我が王化に浴せしめんとするの骨折りは、實に言語に絶すべきもの也。然れども既に朝鮮八道の山河、悉く我に合したる以上は、新らしき同胞として懇に親和せざる可からず、隨つて新領地の經營に志あるの士は、須く脚を半島の天地に入れて、具さに臨檢するの要あり、鐵を持つ者は、鐵を擔ぎ、筆を持つものは、筆を提げて渡行せよ、往いて親しく點檢せば、想像以上の得る所あらん、而して勝景を探り、而して史蹟を憶ふ、また快事ならずとせず、吾人は茲に人情風俗を説き、名勝史跡を案内するに先つて、日韓古來の歴史的關係と、其今日に臻るまでの經過とを略述せん。

琉球を以て臺灣に渡るの飛石なりとせば、朝鮮は滿洲大陸に渡るの橋梁に似たる要路なり、古來諸學者の證明する所によれば、日韓兩國の關係は、上古極めて密接なるものにて、壹岐對馬を中にして日韓に跨る

一個の政治的民衆のありし事は、幾んど疑ふべくもあらず、其後に於ても元對北條、豐臣對明國の交渉は、即ち朝鮮を介して爲されたるものにて、其使節の來往は悉く此の韓國てふ橋の上を通過せるもの也、而して豐臣秀吉の朝鮮征伐は、其主なる目的は明國にして此に在るにあらず、但だ當時日本に有力なる水軍なく、路を朝鮮に借るの外、大明に攻入るべき捷路を知らざりしが故に、此の天然の橋梁を使用したるのみ。

然る所朝鮮人の爲に此の便利なる橋板を引かれたるより、さてこそ橋梁奪合ひの戦争は開始されたる也、恰も源三位頼政が宇治に立籠りしを、平軍の之を攻撃せしが如く、加藤、小西等の勇戦は、即ち宇治橋上の矢戦なりしなり、而して、宇治合戦には橋上に一來、淨妙、但馬坊などありて平軍を阻害せしに、足利又太郎忠綱の水上を渡つて背面攻撃を加へたるが爲に、頼政軍遂に全敗せしが、豐公の征韓は水軍の幼稚に加へて、

彼の沿岸の事情に暗く、潮水の干満によつて進退するを知らざりしため、脆くも李舜臣に敗られて、水陸兩軍の一致を缺き、證明の大覇圖之が爲めに脆くも頓挫しぬ、然れども是より以後、我國民をして朝鮮の位置の如何に重要なかを覺らしめたり、随つて徳川幕府以來の征韓論は、これに胚胎したるものに外ならず。

此の天然の橋梁は、單に武に使用するに止まらず、文にも又資する所大なり、亞細亞大陸に發生したる二種の文明を輸入するの經路は、即ち之に外ならず、漢學の日本に傳はりし事が、果して應神天皇の時代にありしや否やは疑問なれど、兎に角此の橋を渡つて我邦に入りし事實は明かなり、又印度の佛教が支那を經、朝鮮を經て我國に傳はりし事も隠れなきところ、其他美術工藝等總て皆な西方より朝鮮てふ橋を經由して輸入せられたるにあらざるなし。

然れども、由來日本人と朝鮮人との間には、支那と日本との間ほど、それ程文化の差異なかりしが故に、我國人の智識進むにつれて、韓半島は漸く橋梁としての價值を減じ、日本は直接支那に交通して、其文明を直輸するに至れり、更に又近世船舶の構造に急速の進歩を見るに及んで、此の橋の價值は一段減せざるを得ず、日清日露兩役に於て、我軍隊の一部は鴨綠江を涉つて、滿洲に入りしは事實なれど、それは制海權の未だ十分ならざるに由りし也、我海軍の海上に羽翼を伸したる後は、敢て此橋梁を藉るの必要を見ず、然れども安奉線工事の竣成する上は、再び橋梁としての朝鮮の價值を回復すべきが、遂に往古に於るが如く重要な用をなさず、橋梁たるの用途は頗る縮限せられたるものと知るべし。

要するに昨今に於ける、朝鮮の位置は、露國占領當時の對馬、英國占領當時の巨文島を擴大したるが如きものにして、東亞に於ける用兵の足

溜りのみ、今後露清兩國の進路的政策に出でざる限りは、此の橋梁も甚だ重要な用を爲さざれど、我國にありては、消極的國防策の上に、必要缺くべからざる地域なりとす、試に日露戰役の勝敗顛倒したりとなし、日本人は擧つて韓半島より驅逐せられたりと假定せば、我邦の運命は實に寒心すべきものなりしならん、故に朝鮮今日の位置は、單に一橋梁に非ずして、寧堤防に價する也、東京に於ける權現堂の堤防の如し、何人が其局に當るも、日本の政策が常に此の半島の經營に傾くは、外界の壓迫おのづから然らしむる所なりとす、即ち人為にあらすして天爲なり。

朝鮮の今日ある、日本古來の宿題と云へば云ひ得べし、而も確實に合併案となつて現はれしは、日清戰爭以來、日露戰役後なりとす、勿論その以前にも朝鮮併合の議を建てたる國士は多々ありき、就中維新前後の佐田白茅の如きは、最も急先鋒の一人にて、所論頗る大膽を極めたり、然

れども开は唯だ一の國權擴張論者の希望たりしに過ぎず、西郷板垣の如き之を廟堂の議に上せしものありしも、之とて一の主張にして、尙ほ實行には距離なしとせず。

佐田白茅の名は多く聞ゆるなしと雖も、確に一隻眼を有せし隠れたる偉人なりき、人は西郷南洲を以て海外膨脹論者の首魁なるが如く唱ふれど、實は佐田白茅の所説に基きしものに外ならず、而して日本の世界に於ける位置の危険なるを自覺して、大陸經營の策を建てしは既に徳川時代より始まりし也、其人々の多くは長崎に來往し、和蘭人に交つて親しく世界の氣勢に通じたる士なりしが、就中最も異彩を放ちしは出羽の佐藤信淵其人なりとす、宇内混同秘策を著はし、滿洲を手始めに全支那を略し、更に歐洲に及ぶべしといふ、獨逸皇帝の所謂黃禍論其儘の策を建てたる林子平の海防論を承けて、更に其規模を大ならしめし

者にて、當時は勿論、今日に於ても其空論たる事は免れざれど、兎に角徳川時代既に世界的眼光を有したる人の在りしを證據立たしむるに足るべし、其後又備中の儒者山田方谷、山東經略論を著はして海外發展の急務なるを叫びぬ、嘉永年間、米使渡來後に至つては愈々滿韓地方に着目する者多く、薩摩藩主島津齊彬公の如きは、日夜清韓地圖を座右に置いて大陸出兵の日あるを談じ、攘夷論者の上手を越すや遙なりき、大西郷は此の島津侯の藩より出で、佐田白茅の建策に同意せし者なれば、西郷必ずしも大識略を獨有したりとは稱し難けれど、板垣伯の如き單純なる征韓論者に非ずして、大使派遣論といふ文明的の至極穩當なる主張なりき、而もその穩かなる提議の行はれざりしは、西郷の爲に遺憾とすべく、日本の爲には二三十年の歲月を晩れしめたる所以たるや明らかし。

征韓論者にして今の朝鮮合併に功あるものとせば既に右の如き先輩又先輩の有りし事を忘る可からず、維新以後に於ても、福澤翁の如きは夙に韓國半島に着眼し、獨立して日本の有力なる同盟たらしむる能はずんば、斷じて他國の手に委すべからずとの意氣を以て、先づ青年の教育に其力を致し、次で彼の開化黨の志士を助けて、百方劃策する所ありし爲め、却て政府の忌諱に觸れて、久しく邪魔扱ひせられたる事あり而してその唱ふる所は、壯快なる征韓論ならざりしが、故に、大向ふの喝采を博せざりしとは云へ、所謂、ハ、ハ、ハ、連の見通す可からざる名優たるを失はず。

愆くの如く、日本の政治家、學者中に韓半島及び滿洲の經略を策したる人も、尠なからざりしが、我が政府がいよく、朝鮮合併の臍を固めて其用意に取かゝりしは、日露戦争の結果なりとす、爾來五年間、漁夫の地

曳綱を曳くが如く、次第々に手繰り寄せて、遂に最後の合併實行に漕附けたるは、巧妙と云へば、巧妙に相違なきも、随分お骨の折れし事と察するに餘りあり、而して其爾く巧妙手段を用ひざるを得ざりし次第は、主として日清戦役の終結に際して、一大英斷の機を失したるが故なるべし、當時我が政府の意は一氣に朝鮮を處分せずとも、滿洲の一角を切離して、我有とせば、韓と滿との繋縁はおのづから斷たれて、自然的合邦の運に至るべしとの説なりしが、これ又些の違算なしとする策ならざりしが、如し、清韓兩國はよし、滿洲の一角に隔てらるゝとするも、海上の交通まで制扼する能はず、兩個聯絡を保たんとすれば、容易に之を保ち得べき也、當時最善最良の策として、滿洲の割取よりも、朝鮮の獨立を有名無實ならしむること、日露戦争終局の際に於けるが如くするに在りしは、極めて明白なる事にてありき、故陸奥、伊藤の諸公は必ず夙に之を

看取したるに相違なし。

然るに之を實行せざりしは奈何、蓋し、戦勝の意氣昂れる武人の滿洲割取論を制止し能はざりし爲なるべし、而して又滿洲を割かしめたるが上に、曾て自から標榜せる韓國獨立の看板を急に撤するも、列國の手前如何あらんと遠慮したる結果なりしならん、然れども當時清國爲政治家の腦裡には、素より韓國の獨立あるなく、支那の屬邦たらずんば、日本の屬國たるべきものと思惟せるものなりしが故に、合邦の談判は決して至難事にあらざりしなり、日露戦争の當初にも、我は朝鮮の獨立を標榜せり、而して戦勝の後、之を撤去しぬ、獨立の空名なるは世界の齊しく認むるところにて、日清日露兩役とも、要は朝鮮を争ふものと歐米人はお察しがりき、然るに當の日本は餘りに仕事に念を入れすぎて、可惜機會を逸し、自ら呼號せる獨立の聲に自ら縛せらるゝ姿に陥りぬ、佐

田白茅の策したるが如き、三十大隊の兵を備へ、大使の京城に刺さるゝを待つて、以て八道を蹂躪せんとの法略は、素より亂暴に過ぐる放言なりと雖も、到底獨立の能力なき者に獨立の虚名を教へ、世間體を憚りて其始末に窮せしは、老政治家の分別餘りに、丁寧に過ぎたりとや言はん、遮莫、日韓數百年の懸案は茲に幕を切られ、旭光一射、日韓の界なく遠く照して、鷄林八道の山河おのづから明かに、明治の御代を謳歌するに到りぬ、朝鮮の爲に祝すべく、日本の爲に賀すべし、而して兩國間の葛藤は明治四十三年を以て消失し、新に東洋の歴史に地圖に、大日本帝國の膨脹して、新同胞の人口我と合して増加したるを、吾人は赤誠を以て感謝せずんばあらざる也。

◎豊公征韓史略

秀吉の雄圖と暗闘採消策——碧蹄館の大勝——詐欺的媾和——再度の征韓——蔚山籠城の慘狀——水軍の失敗と外征の目的を達せざりし原因——豊公の功績

既に日韓古來の關係と國際史略と合邦の經過とを説きぬ、之れより古戦史に溯れば、前には神功皇后の御事あり、豊太閤の征討あり、近く日清日露の兩役あり、何れも戦史として朝鮮に關係なきはなけれど、神功皇后のそれは餘りに遠く隔りて史材に乏しく、日清日露の戦役は餘りに近くして、何人も知る所なり、故に吾人は、戦史を語るべく、最も興味多くして、最も思索に價ある稀世の英雄豊太閤の征韓戦争を略記せんとなす。

秀吉の事は前に幾度も述べたり、茲に煩を避けんが爲に、征韓の動機及び原因等を架説せず、直ちに本文に入るべし。

秀吉未だ信長の臣下たりし頃、その中國陣に赴かんとするに際し、信長の汝克く功を奏さば、中國九州の地を擧て汝に與へんと言ひしに對し、『中國九州の地は有功の諸士に賞與せられよ、臣は進んで朝鮮を席卷し、直に明の都城を陥れ、三國を合せて一と成さん』と氣を吐きしが、是れ渠が朝鮮半島を橋梁と見做して、其雄志を大明に展べんと企てし萌芽なりき、而して其天下に覇たるや、一日高きに登つて遠望し、歎じて曰く『丈夫當さに雄を世界に争ふべし、奈何ぞ長く一隅に安處すべけんや』と是れその動機と云へば動機なり、加之、天下漸く定つて戦亂の餘塵未だ散するに至らざるに、諸侯皆な功を懷ひ、賞を争ふの念盛ん也、秀吉此の暗闘を際消すべく、兵を海外に用ひて、諸將の鬱を散せしむるに如かずと、これ又外征の最大近因なりとす、恁くて關白の職を甥秀次に譲り、自ら太閤と稱して隱居し、先づ對馬の宗義智をして、朝鮮に赴き

明國を攻むるの意を告げて其嚮導を爲さしむ朝鮮王李暉従はず秀吉依て先づ韓國を征せんと欲し西南の諸侯に令するに各々國に就きて兵糧を蓄へ、明年四月を以て九州名護屋に會せよと云ふを以てす。

翌年秀吉名護屋に本營を進め、浮田秀家を元帥として己れに代り往かしめ、増田長盛、石田三成、大谷吉隆を參謀に、加藤清正、小西行長を先鋒として總軍之に繼ぐ、而して別に水軍を設け、加藤嘉明、藤堂高虎之に將とし、秀吉は留つて名護屋に大本營を構ふ、徳川家康、前田利家、上杉景勝、蒲生氏郷、佐竹義宣、伊達政宗等東北の諸侯は、皆な兵を率ゐて本營を護り、外征の軍は威風堂々として名護屋港を解纜す、時に文祿元年三月の事なり。

諸將既に外征の途に就く、小西行長、素と水路を請んずるの故を以て第一に先着すると同時に、釜山及び東萊を陥れ、清正は別路より進んで

慶州を抜き、更に國都を攻む、朝鮮王大に驚怖し、都を遁れ平壤に走つて援を明將に乞ふ、茲に於て元帥秀家全軍を提げて國都に入り、以て根據地となし、諸將をして道を分つて國王を追はしむ、清正は即ち咸鏡道に行長は平安道に、毛利輝元は全羅道に、黒田長政は慶尙道に、森忠政は江原道に、蜂須賀家政及び小早川隆景は黃海道に、それ／＼部署を分つて國王に迫りぬ。

清正先づ咸鏡道に入つて、朝鮮の二王子及び大臣等を會寧府に捉へ、尙ほ進んで北境凡良哈に至つて軍を鏡城に返す、平安道に入りし行長は、彼の將、金命元を大同江に破り、長驅して平壤を陥れしが、流星光底、李王は又も義州に遁れたり、時に明主、祖承訓、史儒の二將をして兵を率ゐて來援せしむ、行長逆へ撃つて大に之を破り、史儒を斬る、承訓身を以て僅に免れぬ、明主この敗報を聞いて大に怖をなし、沈惟敬なる者を行長

の陣に遣はして和を講せしむ、惟敬往復して和議未だ熟せざる時、明將李如松大軍を率ゐて至り、行長を平壤に圍む、行長支ふる能はず、城を棄て遁れしが、如松の之を追ふこと甚だ急なり、立花宗茂來り行長を救ひ、追兵を撃て之を却くるに遭ふて、行長漸く京城に入る事を得たり、已にして如松京城に來り迫る、宗茂、毛利秀包、小早川隆景等と之を碧蹄館に逆へ戦ふて大に明軍を破る、敵死傷算を知らず、如松幸うじて坡州に遁れ、又戦ふ事能はず、世に碧蹄館の大勝と謂ふもの即ちこれ也、如松前の敗軍に懲り、再び惟敬を遣はし、厚く行長に賂ふて頻りに和を議せしむ、行長惟敬の言を信じ、秀吉に報じて曰く、「明主殿下を尊んで明の皇帝と爲さんとす」と、秀吉即ち和を聽し、諸將に會して兵を解かしめ、書を明主に贈つて曰く、「貴國、兵に和を欲せば、宜しく皇女を納れて我が后妃たらしむべし、又朝鮮を二分して一を我に容れしめ、且つ朝鮮をして

王子及び大臣を質として我國に送らしむべし」と即ち小西如安をして惟敬と共に明に赴かしめ、又朝鮮の二王子を返さしむ、惟敬、行長、如安と謀りて密に秀吉の書辭を改め、「秀吉明の冊封を望む」と修正し、携へて明に至る、明主仍て李宗誠、楊方亨を正副使とし、如安、惟敬と共に我邦に到らしむ、途朝鮮を過ぐる時、正使李宗誠我が軍威に怖れて逃れ去る、明主即ち楊方亨を正使とし、沈惟敬を副使と爲す。

是より曩き、秀吉の寵妾淀君、秀頼を生む、秀吉大に喜び、軍事を家康、利家に託して大阪に還り、更に伏見に城を築いて之に居る、時に關白秀次淫蕩を縱にして亡狀多きにより、秀吉奏して其職を褫ふと共に、遂に之を殺す、此時小西行長先づ歸來して和成り、明使來るを告ぐ、秀吉乃ち諸將に令して兵を解かしむ、此に於て我軍皆な歸り、次で明使韓使と俱に來朝す、秀吉之を伏見城に延見せしが、朝鮮の使は王子の親ら來り謝せ

ざるを責めて延見せず。明使封冊及び冕服を上りしを秀吉僧承兌に命じて冊文を朗讀せしむ。文中「汝を封じて日本國王と爲す」の語あり。秀吉忽ち憤怒し、冊書を扯裂き激罵して曰く「吾れ我が武威を以て日本を平定す、何を釋廢の封を要せん、且つ我にして日本王たらば我が皇室を奈何にすべきぞ」と。行長及び明使を戮らんとす。承兌の之を慰解するに、然らばと秀吉再び明韓の使者を召して曰ふ「我れ再び兵を擧げて汝の國土を屠らんとす、汝等速に歸つて其旨を主に告げよ」と。即日兩使を逐還するや、直ちに朝鮮再征の令を諸將に下しぬ。時に慶長元年九月なりき、之を征韓前役となす。

翌年二月小早川秀秋をして元帥たらしめ、毛利秀元、浮田秀家の二將を副となし、黒田孝高を參謀として再び征韓の途に就かしむ。兩先鋒の他は總て前役の如し、秀秋やがて諸軍を督して釜山に上陸し、據つて

根基とす。加藤清正先づ進み行く、諸城を抜いて國都京城に迫る。毛利秀元、黒田孝高等は別路より來り會す。明主我軍の再び朝鮮に向ふを聞き、刑玠、楊鎬、麻貴等を將とし、大軍を率ゐて來援せしめ、韓兵と俱に固く國都を守つて敢て出戰せざるに、我軍も亦持重して進み攻めざりき。時に天甚だ寒く、雪降ること連り也。清正退いて蔚山城を守りしが、明將楊鎬、麻貴等兵を三道に分ちて來り攻む。清正、淺野幸長と共に之を固守するに、明軍我が糧道を斷ちたる爲め、城中食竭きて飢渴交も迫る。士卒皆な紙を喰ひ土を咬み、馬を屠つては其血を啜り、死屍の肉を割いては朝夕の命を繋ぎ、辛酸を嘗むる事甚だし。蔚山の急報釜山に達するや、小早川秀秋、毛利秀元、黒田孝高等軍を叱して來援す。清正即ち城門を排して突出し、明軍を夾擊して大に之を破る。楊鎬、麻貴等身を以て免れたるが、世に蔚山の籠城と稱するはこれ也。後ち明軍再び蔚山に來つて城

を圍む、立花宗茂、手兵五百騎を率ゐて來り、援はんとする途中、大に明軍の到るに會す、宗茂、大霧に乗じ、聲つて敵を壞走せしめたるより、圍忽ち解く、而して、島津義弘の新築に屯する時、敵兵夜襲し來つて、火を放ち、營中驚き擾るゝに乗じて、明軍來撃す、義弘士卒を叱咤して、大に奮闘し、遂に之を破りしが、敵の死傷算を知らず、明軍甚だ恐れて、是より敢て來り追らず。

始め我が水軍の將加藤嘉明、藤堂高虎等、朝鮮の水軍を唐島及び閑山島に破りて、其將を斬りしより、朝鮮王、李舜臣をして、三道の水師を統べ、我軍を古今島に邀へしめしが、渠克く戰ふて、我水軍屢々破らる、これ即ち我軍最後の、大勝を得ざりし所以也。

慶長三年、秀吉病に臥す、因て、徳川家康、前田利家、毛利輝元、浮田秀家、上杉景勝を五大老となし、中村一氏、生駒親正、堀尾吉晴を三中老に擧げ、更

に石田三成、淺野長政、増田長盛、長束正家、前田玄以を以て五奉行とす、殊に徳川家康をして、庶政を裁決せしめ、前田利家に託するに、秀頼の輔佐を以てし、片桐且元、小出秀正を秀頼の傅となす、既にして、豊公病革まるや、遺命して、征韓の諸將を召還せしめ、遂に六十三歳を以て、伏見城に薨す、恁くて、英雄一代の偉業は、中途にして挫折し、折角の明韓經營も、その素志を貫くに至らざりしが、後世また其功果決して空しとせず、而して、豊公征韓の蹟を鑑るに、秀吉その雄圖を、發展すべく、水軍に於て餘りに、違算多かりし也。

陸に於て、明韓軍を蹴散らすこと、猛虎の羊に於けるが如かりし我軍も、海に戰つては、眇たる一李舜臣の爲に、窘められ、遂に完全なる制海權を占むる能はず、之が爲に、我が陸軍の行動を、滯滞せしめたる事、それ幾許ぞや、秀吉が、外征軍の重任は、陸軍にあらすして、水軍にあり、其兩度の

出征とも、全功を收むる能はずして終りたる主なる理由は、出征諸將の不和なりしが爲にもあらず、元帥その人を得ざりしが爲にもあらず、行長等の小刀細工を弄せし爲にもあらず、要するに、我が當初の作戰計畫に基て、水軍は黄海に、陸軍は遼東に前進し、水陸の連絡を圓滿ならしめて、輜重兵站の供給を充分にすべき豫定の行動を取る能はず、陸軍をして懸軍孤立の窮境に陥らしめたる結果に他ならず、歴史は這の著大なる祖先の缺點を後世の日本人に明示し、維新の覺醒以來、偏へに海軍力に意を傾注せしめたるにより、日清日露の兩役に於て、倭寇と秀吉との損失を償ふて餘りあるの功を奏し得たるは、吾人、古英雄の教へたる經驗の賜として深く感謝せずんばあらざる也。

既に豊公の征韓戦史を略述したり、依て更に勝地と史蹟との主なる地を案内し、以て本篇を結ばんとす。

◎朝鮮探勝史蹟

征韓第一著の古蹟——仙境の詩話——京都を穿鼻する京城——高麗の古都——錦粉の好材料たりし半島の古戰場

由來朝鮮は山水の勝に富む所にあらず、故に此地に遊覽せんには、風景の美を賞するを客分とし、史蹟を主として勝を討ぬるを可なりとす。吾人の案内する、又其意を以て要所を摘擧せんのみ。

汽笛一吼、纜を馬關に解いて針路を西北に採り、對馬の翠黛を左舷に望んで、海路百三十三哩を航行すれば、早くも釜山港に達すべし、此地明治九年の開港場にて、内地より朝鮮に入る第一の關門也、元より半島縦貫の鐵道によつて、八道の山海を跋渉するを得べし、此附近に文祿の役加藤清正、小西行长等の先頭第一に上陸せし釜山鎮の市街あり、豊公征

韓の際諸將此所にて部署を定め、清正は右翼軍、行長は中央軍、小早川隆景、黒田長政の二將は左翼軍として前進したる事は前述の如し、當時小西行長の築きし城壁の址は、西方の丘上に仰ぎ見るべく、韓人の手に成る釜山鎮の廢墟は尙ほ殘墨を止む、又此地の北方二里なる東萊府は、朝鮮左道水軍牙營の在る所にて、節度使之に臨み、府の北に北山あり、高さ五百尺、府城は此山の頂上より南下して平地に至るまで高さ二間、周圍一里の城壁を以て、區劃し、四方に樓門を設く、また當年の古戰場たりしと知るべし。

釜山鎮より馬山浦に至るべく歩を西方に向けんか、洛東江の長流には千八百尺の長橋、帶の如く横はり、馬沙峙の隧道は、一千餘尺の暗を破つて列車を通じ、山を越えて西すれば、進水、昌原の古戰場あり、壞樓殘壁荒れ果てたる所に征韓戰の昔を偲ぶべく、島津氏の築ける古城址また

茲に存す、その内城外城の跡を過ぐれば、やがて靜波鏡の如き馬山浦に達す。

釜山より京城に到るの中間に、地勢高峻にして、屏風の如く南に聳ゆる天摩山あり、其西に摩尼山あり、共に文祿役の古戰場にて、山岳重疊坐るに南壽の仙境を見るが如し、此地に落花臺と稱する詩的の古蹟あり、昔一妓生、その情人を送つて此地に來りしが、戀々別るゝに忍びずして終に身を斷崖に投下して死せりと傳ふ落花臺の名稱また湖命の美婦を弔ふに足らん乎。

之より京釜鐵道の沿岸には尙ほ三四の勝地ありと雖も、就中記憶すべきは稷山金嶺と成歡の古戰場なり、美江以北、内板を経て鳥致院に達す、此地の華陽洞は、落影山の麓に在りて、山水の明媚なる、泉石の瀟洒たる、蓋し半島第一の勝地たり、豊公征韓役の古戰場なる清州は又これよ

り遠からず、此附近、當時の事蹟を記する石碑多々あり、以て史料とすべし、此地より數里の山間を辿れば、金鑿を以て久しく内地人に知らるゝ稷山驛あり、これ半島の一大富源なりとす。

成歡驛は日清役の序幕を演じたる當初の舞臺なる事は普く世人の知る所、明治廿七年六月、混成旅團長大島少將その部隊を督して京城を發し、進んで此處に迫り、當時牙山より上陸して駐屯せる清將葉子超、聶士成等の軍を撃ち、劈頭第一の凱歌を擧げたりし地なり、立て四顧すれば、西方は丘陵委蛇として連なり、以て北方を睥睨すべく、恰も仁川より上陸して京城に入りたる我軍に對す、初め清軍が、此地に據つて京城の動靜を觀望したるは頗る陣地の選擇に當を得たる者なりとす、之に對する我軍は、北方平澤より進んで、同月廿六日、曉天未だ薄暗きに乗じて敵營を襲ひたりき、而して先頭の中隊長松崎大尉、時山中尉の如き諸將

校の奮闘して遂に戦死したる安城渡は、近く指呼の間に在り、訪者この丘上に立て願望せば、心魂まさに當年に飛遊して、砲火の響きを聞くの感あるべし、之より些々たる地を省略して直ちに京城に入らん乎。

京城は一に漢城と稱し、李朝五百年間の古都にして、面積戸數等我が名古屋市に匹敵すべき都會也、而して山河襟帶の形勝は稍や京都に似たるものあり、北漢山の北に聳えて、麓に昌德、景福の兩宮あるは、東山の麓に祇園、清水、智恩院のあるが如く、南山の半腹なる和城臺の邊りに、茶屋の軒を連ねたるは、嵐山より嵯峨、御室の景を縮小したるかと思はしめ、市街の中央を横斷する川は鴨川に擬すべく、而して大廣通橋、長廣橋、水標橋、河里橋、太平橋の五大橋を架したるは、京の三、四、五條橋に對比すべし、加之、その河積に白衣を洗ふて曝すの狀、其景、其趣、何ぞそれ我西京に酷似するの多きや、其河水の流れて漢江に注ぐは、鴨川の注いで、澱河

に合するに同じく婦人の頭上に物を載せて歩行するさまは、八瀬大原女のそれに相肖たり。

市街は中、東、西、南、北の五署に大別し、更に其中署を八坊、東署を七坊、西署を九坊、南署を十一坊、北署を十三坊に小分す、而して各坊また小區せられて、之を契と呼ぶ、總計五署四十七坊、三百四十契と爲る、市區は恁の如く整然たるも、道路不潔にして、家屋矮陋なれば、之でも都府かと疑はるゝ程なり、唯だ東大門より西大門に通ずる本街道と、南大門より鐘路に至る街路とは、道幅廣くして、市區改正後の東京市にも劣らざるものあり、之を要するに、京城の地勢は、和趣の代りに、漢趣を帯びたる、京都にして、我が西京より和趣を抜いて、漢趣を帯びしむれば、即ち京城と爲る、彼我の差は唯だこれ而已。

京城の名物として三個の王宮あり、一を慶運宮、一を景福宮、一を昌德

宮と謂ふ、慶運宮は李朝前國王の御座所なりしが、其建築の極めて簡單に、質素なる有様は、一目王宮と覺しからぬ程なり。

次に景福宮は、白岳山の南麓に在つて、曾て大院君の攝政たりし當時全國の良材珍木を國民より獻納せしめ、一千萬圓の巨額を投じて建築したる者なり、隨つて慶運宮の小規模なるとは雲泥の差にて、半島の宮殿としては餘りに贅澤に失するばかりの偉觀を極む、正門を光化門と稱し、門前には内部外部度支、軍部、法部、學部、農工商部、中樞院その他の各官衙巍々として列り、門内には、我朝の大極殿にも比すべき勤政殿あり、國王政に當り給ひし所にて、殿内廣壯、裝飾物の華麗なる、實に驚嘆に價するものあり、更に轉じて、崇陽門を入れれば、修政殿あり、一に議政府と稱し、曾て金宏集内閣の時改造せし一大議政場なり、其奥には國王の居所たりし宮殿あり、殿の左右には延命殿、府址殿、交泰殿などすべて制を清

國北京の宮城に則り、贅を盡し、華を極めたり、更に前方に進めば、國王の寢所なる乾清宮に達すべし、方一丈許の小室、數多く區劃せらるゝは、官女の房室にて、此傍なる小門を出づれば、玉壺樓と名くる一宮殿あり、これ王妃閔氏の凶刃に斃れたる所なるが、此の凶變こそは實に前帝太皇の、此の壯麗なる宮殿を嫌ふて、慶運宮に遷座せられたる原因なりとす。

昌徳宮は歷朝の君主の久しく居とせし所也、正面なるを進喜門と稱し、之を内に入れば延陽、協陽、建陽、崇徳の諸門あり、景福宮に比すれば、一般の構造規模甚だ小なりと雖ども、之を慶運宮と對照すれば、境域の廣きこと、又同日の談にあらず、國王の御座所を錦福軒と稱し、齋閣彫欄の美術として觀るべき物多しと雖も、久しく修理を怠りて、荒廢に歸せしめたるを痛ましき、以上の三宮を概觀するに、景福宮は壯麗を以て優り、昌徳宮は古雅を以て勝る、單り慶運宮に至つては何を以て勝れりとす。

るか、吾人之を語るの資料なきを憾みとなす。

京城附近の名勝としては、先づ市の公園和城臺を見るべし、此の丘上、京城全市を眼下に瞰視し、文祿の役増田長盛の築城の址あり、更に日清戦役の劈頭、大島旅團長の久しく本部を置きたるは此丘に外ならず、又和城臺の背後なる南山の絶頂に上れば、舜臺あり、孔明の忠武廟あり、山を下つて城内の中央なる塔洞に至れば、往昔明國より齎らせしてふ蠟石の珍奇なる佛塔を見るべし、次に東大門外には關帝廟あり、孔子廟あり、又一覽の價值なしとせず、郊外一里の清涼里には王妃閔氏の墓あり、て風光に富み、孔往里には、朝鮮近世の傑物たる大院君の居跡と墓陵とを存す、また弔ふに價すべし、之より京城を辭し、京義鐵道の沿道に進まん乎。

京城の西、高陽を過ぐれば、曾て文祿の役小早川隆景が、明將李如松の

大軍を粉蓋せし碧錦館の古戰場に至るべし、茲に當年の人を弔ひ、更に坡州、長湍を経て義州街道を直行すれば開城に達す、是れ高麗の舊都にして、一に松都と稱せらる、周圍を繞る城壁は、大半壞廢に歸したりと雖も、城門は依然として壁上に存す、また京城以西の要鎮たり、高麗三十一代四百年間の舊都といふだけにても、漫るに我が奈良の地を聯想せらる、而して滿月臺なる高麗王宮の遺蹟、萬青山の高麗七陵など、往古を偲ぶの材料に乏しからず、又市の東端なる善竹橋は、高麗朝末葉の王たりし鄭夢周が、李朝の刺客趙英珪の凶刃に弑殺せられたる所にて、今尙ほ石橋上に血痕を印すと傳へらる、其他明月亭、關羽廟、穆清殿等、詩人の勝を斷たしむべき古蹟多し。

朝鮮最古の都府として、古來我が武人の史談に富む平壤は、半島第二の都會なり、豊公征韓の役には、小西行長の駐まりし所、又日清の戦役に

は野津將軍の包圍攻撃の地として、小學兒童も尙ほよく之を知る、船橋里、玄武門、牡丹臺等の戦蹟は、久しく錦繪の好材料として、繪草紙屋の店頭を賑はしたりき、其地勢は東南より西北に高く、西南は概ね平坦にして、北方に丘陵相接す、大同江は北より南に流れ、城壁は流れに沿ふて、その周圍二里と稱す、城の内外によつて市街を内城、中城、外城、及び東北城に分ち、中城は本城の西北丘陵に在り、外城は朱雀門より大同江に沿ふて西に下り、江流之を劃る、その江の沿岸、周圍約廿丁の高丘、牡丹臺、乙密臺の要害は、即ち其北に位す、是れ日清戦役に、立見少將の朔寧枝隊と、佐藤大佐の元山枝隊とが、敵を東北方より襲撃して占領したる要地なり、此地の北端、牡丹臺の西城壁の外なる老松翁鬱たる間には、箕子廟あり、又東方大同門より江を渡りて對岸の船橋里は、日清戦時、大島少將の旅團が最も苦戦したる古蹟也。

平壤を辭して西北に歩を進め、安州に至れば、大江の道に當つて横はるを見る、之を清川江と稱す、而して此附近數里の沿岸は、日清戦争の劈頭、彼我騎兵の初めて衝突したる戦端序開きの記念地たり、之より義州に至るの間、車笠館、松山の邊り、沿道を挟んで隨所に古城址を見る、皆な滿洲方面より外敵の侵入し來るを防ぐ爲に設けられたる者の如し、而も今は荒れに荒れて、唯だ壞壁殘礎の蜿蜒として山より谷、谷より里に列なるを見るのみ、以上の外、朝鮮半島には觀るべきの地探るべきの史蹟殆んど無しとは限らず、然れども此他は茲に語るべく餘りに無價値の者なるが故に、故意と記さず、讀者請ふ半島の地に到らば、豊公偉業の戦蹟と近く日清战役の經營の蹟とを、輕々に看過し給ふこと勿れ。

日本名勝史蹟地の巻終

巻末に書す

既に名勝史蹟を草したる、願れば遺漏少なきにあらざるが如く、亦自己の趣味に殉しての偏傾あるべし、されど、説くべきの要所、述ぶべきの要點は、收めて失はざりしを信す。

其區分の如きも、帝城の所在地なる東京及び其附近を初筆と爲し、其他は自然執筆の便宜に隨つて方面を別てり、故に必ずしも、東海道、東山道、北陸道など、云はず、一例を擧ぐれば、同じく東山道にても、其の或る部分は奥羽地方に屬し、或る部分は關東地方に入り、又其或る部分は信越地方に編せらるゝ也。

地と史との關係に就いては、今更贅語を費すの要無し、此書地に憑り史を憶ひ史に緣り地を見るの料として、讀者が旅行の友たれば足れり、文を舞はし筆を弄びて事實に粉飾を加ふるは、我が事にあらず、亦敢て

此書に藉りて史論を試み風景論を爲さんとするにあらず、要するに事實をして、事實たらしめつゝ之に好個の着眼點を求めたる結果をば、或る形式に依りて排列したる者のみ、此中若し讀者をして史蹟を史蹟として見るの外、史蹟を風景として見るべく、之に着眼する方法を研究せしむるに於て、其参考となるべき部分あらば、縦合輕少にても、此書の目的は即ち達せられたる也。

日本の風景は麗美なりと雖も、日本の歴史は莊嚴なりと雖も、畢竟共に規模の小なるを憾と爲す也、然れども、既に半島に發展せし日本人にして、豈進んで大陸に發展すること能はざるべけんや、東亞の野、南米の原、新日本興隆の運氣變遷たり、異日再び、名勝史蹟を編するの機會に遭遇せば、庶幾くは、日本の風景と歴史との共に小規模なるを憾まざるを得るに至らん歟。

明治四十四年四月十五日印刷
明治四十四年四月十七日發行

名勝史蹟地の巻
定價金八十錢

著者 伊藤 銀 月

發行者 前川 又三郎
東京市京橋區中橋廣小路六番地

印刷者 金子 久太郎
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所 三協印刷株式會社
東京市京橋區弓町二十四番地

不許複製

發兌元

東京市京橋區中橋廣小路
電話 三七一七番

前川文榮閣

前川文榮閣出版發行圖書目錄

高橋五郎先生著書目

釋迦論

一切の世態を退けつゝ一切衆生の爲めに不退轉の誓を起せる大恩教主の眞面目な著者獨特の精緻の見を以て詳論したるもの即ち是れ

人生觀

本書は古今幾多の人生觀を採擷して遂に健全無病なる安心立命的大人生觀を説述せるもの、人間の人間たる本分を知らんと欲せば本書を讀め

宇宙觀

萬物の靈長たるの唯唯生歎死世は何たる我は何たるの理を闡明して又餘す所なし

人生哲學

學問と宗教は本書を俟つて初めて學問の和階に達すと云ふべし是れ超群絶倫の最大人生哲學

新設一元哲學

著者が該書の論と深遠の考慮とは世に一元哲學一冊を出版す。即ち「天入論」の一元主義を詳説せる所痛快の著なりと謂ふべし

戰爭哲學

出で、戦ふ者居て守る者共に戰爭の哲理を常に胸底に養ふるを要す、本書が立論の清新なる所逸すべからざる也

世界三聖論

著者の犀利なる筆を以て世界に於ける三聖の眞面目をして紙上に躍如たらしむるもの即ち本書也矣

日蓮論

大日本の法華經と唱へて自ら國家の柱石を以て任じ權勢と戦ひ道徳に對せる英雄日蓮の異彩を詳説せるは本書一篇の消息なり

定價金八洋

定價金七洋

定價金七洋

定價金七洋

定價金七洋

定價金七洋

定價金七洋

定價金七洋

定價金七洋

定價金七洋

新體女子用文

現代時文の大家鹽井雨江先生の新作を筆硯界の巨擘小野鷲堂中村春堂兩先生が淨磨せられたるもの加ふるに極上和紙に印刷し高尚雅麗なる製本の體裁は更に錦上花を添ふるものと云ふべし

宮中御歌所寄人 中郵秋香先生著

文千草の錦

先生が三十餘年間古學復興以來諸名家の文中男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等無慮數百編を選出せられたるもの即ち本書也

中郵秋香先生新作 小野鷲堂先生著

新編手紙

女子大學校教授 鹽井雨江先生著
女子大學校教授 小野鷲堂先生著
女子大學校教授 中村春堂先生著

女子文の手ほどき

本書は中郵秋香先生の新作を小野鷲堂先生が大字に寄せられたるもの習字作文兩用の好著なり

古今集詳解

合本總クローニ箱入定價金二圓廿五錢郵稅廿四錢
國歌國文研究者は勿論我國文學の花を味はんとするものは前人未發の解釋をたす本書を先づ讀め

新編書簡文例

本書の文例は秋香先生の簡潔な撰れる作、書は鷲堂先生が大手腕を振られたるもの兩々相俟ちて眞個男女學生が好伴侶

中郵秋香先生著

新編書簡文法式

本書の法式を知らざるは尙人に似なきが如し本書は今日の現狀に依り最新を對照して以て時宜に從ひ適當の式を設けられたるものなり

新女子書簡文法式

宮中御歌所寄人 中郵秋香先生著

定價金五洋

定價金四洋

定價金四洋

定價金四洋

定價金四洋

定價金四洋

定價金四洋

定價金四洋

定價金四洋

定價金四洋

定價金二圓十錢

定價金六洋

定價金六洋

定價金六洋

定價金六洋

定價金六洋

定價金六洋

定價金六洋

定價金六洋

定價金六洋

定價金六洋

失樂園 近刊

ミルトン氏原著 高橋五郎先生譯

失樂園の大作從來日月と光を争ふ、其脚色の巧妙なる、其結構の雄大ななる、宇宙を吞吐して、餘りあり、其筆を筆上に弄し、地獄を脚下に展開して、天軍軍放、魔王、陣を空中に激戦し、電光石火、炎火の途に執れ、出せる者、高橋五郎先生此の秘密を全副の筆に描き、精細緻密加ふるに、原註の難句を解くあり、原文一行、ロストの真面目始めて見ると、先生拾遺年の苦心、今や譯成る、乞ふ受取を賜へ、

大乘佛教史論

本書は大乗佛教の教理系統の異同を歴史的に考察したるものなり、原註の明瞭と文辭の流暢とは的確なる考證と相俟つて一段の光彩を加ふ、

小乗佛教史論

原註の明瞭は今日所謂小乗史にして、大乗史は後世佛説して、其説を説きし新説なり、本書は小乗史の印成より、日本に傳來せし事實を蒐集して、之に意見を加へ、以て世に問はんとするものなり、希くは新學研究の益と來つて、本書を一巻を讀むべし、

我宗教

トルストイ伯著 加藤直士譯

伯を知らんと欲せば、須らく本書に就け、諸君本書を採りて、心解通讀むて、値に三四行に至らば、伯は從容として、眼前に對らむ、

地理讀本

編りて平易通俗に地理學に關する一般の知識を日文體に記したるもの、家庭用として好適の教科書考用書たり、

親鸞聖人全集

親も眞宗の流を汲み、聖人の人格に接せんとする、非一本を座右に供て、永劫の生命を彼岸に得よ、

法華經物語

佛典の中心たる法華經の光彩は、日の天に於けるが如く、佛書は出でたり、

王陽明詳傳

王陽明の事蹟性行學說を、詳密平易に傳したる者は、本書也、有爲の士は、陽明が成効の歴史を讀み、簡易實用の學を味ひ玉ふべし、

一休和尚傳

元日に齋體を振起して、人の度衡を抜き、末期に説を略ふて、梵天に擡げたる一休和尚は、本書に傳せられて、餘す所なし、

曇鸞大師傳

支那南北朝の時代、黄河々時、雁門の地にありて、徐ろに、靜の工夫を凝らし、心澄慮安の道を立へたる、大師の傳を見よ、

道元禪師傳

禪師の傳は、遠に曹洞宗なるものを形造れり、師が事蹟性行學說は、本書傳へて、餘蘊なし、

弘法大師傳

書道の仙としての大師、佛道啓蒙者としての大師の傳は、如何なる筆に依りて紹介せられたるか、庶幾くば、來つて、本書に其の眞價を知れ、

西行法師傳

歌仙としての法師、求道者としての法師は、若者が多年の研究に依りて、茲に紹介せらる、希くは、居士と天地人生に對する、眞詩人の心聲の響を聞け、

菩提達磨傳

文學博士 井上哲次郎先生著

教理と實踐

佛敎研究の眼目とする所は、教理の研究より、寧ろ實踐の行を、理と實踐とを、尤も、簡明に此の實踐を示せるものにして、開かれたり、彼岸に往生せんとせば、遙かに本書に就けよ、

定價 郵税 七十五 錢

定價 郵税 八十五 錢

定價 郵税 八十五 錢

定價 郵税 八十五 錢

定價 郵税 七十五 錢

定價 郵税 六十五 錢

定價 郵税 六十五 錢

豫言者 宮崎虎之助君著

我が新福音

俗性當時道名メシヤ佛陀、虎之助君抱負の大なる其名の如何なる世の既を知る所今や我が新福音一編を著す初めや如何なる福音をか傳ふる、
正岡藝陽君著

新時代の道徳

文壇の雄者大徳の牧師たる藤岡君新に新時代の道徳なる一書を公にす氏が道徳觀もや如何なる者をや著らす
屈山 小室重弘君著

實驗雄辯學

大演說家たる著者が多年の實驗に基き、談話の秘訣雄辯の妙用を講述せられたる者學生諸君が必ず一本を備ふべきの書也
獨乙ゲーテ原著 高橋五郎君譯

フアウスト

ゲーテが傑作フアウストは今や拉し來りて高橋五郎君先生が明快なる邦文に譯する所となる原文一行邦文一行一字一句なほ有くもせず文壇獨出の快著なり

高橋五郎君註疏

フアウスト

本書は英文の粹を讀み必なる註疏を附して初學者の便にせらる英學者國研究の好伴也
獨乙エツカルト原著 齊木仙醉君譯

毒盃

兩逸文藝エツカルトの傑作にして材を希臘に取らる大曲也ソククワテリス、フアトロン、ヘレナ、等幾多の登場人物は紙上に活躍す
海老名正先生著

耶穌基督傳

井上博士の釋迦牟尼傳と相俟つて我國世界多年の渴を充たしたるものは本書也現今基督傳中の白眉
文學博士 井上哲次郎先生著

釋迦牟尼傳

釋迦の史傳として尤も完全無缺なる又考證詳確なるものは本書なり好評噴々陸續として申込め絶えず内容推して知るべきなり

高須五湖先生著

日露會話獨習

獨習の發音 文法より、日常必要なる各種の用語を網羅せるもの眞に當世會話の粹を萃めたるものと云ふべし
渡部竹蔭君著

明治の家庭

本書は我國現今の不完全不規則極まれる家庭を矯正せんが爲めに生れたるもの家庭の王たるもの、必讀すべき其書也

陸軍少將龜岡泰辰校閱 軍事普及會編

徵兵問答

本書は徵兵に關する凡ての事を記せるものにして國家の干城たる青年子弟が來るべき務の最大説明書也
綱島梁川先生著

病問錄

本書は著者内生活の實踐にして神祕久遠の海國書を傳へたる近代的默示錄也

綱島梁川先生著

同光錄

法説と傳説とを合せ得たる譯註にして而も積極的なる著者の面目と其聖生活の消息を知らんと欲する者は來つて此の同光錄一卷を讀むべし
中村春雨先生著

新約物語

基督教の眞趣を家庭に傳へんが爲めに著者が苦心の大成せしめたる通俗の譯註にして最も平易に編譯せられたるものなり

舊約物語

神學博士 三並良先生譯

佛陀

本書は南方佛説を詳説せられたるものにして彼の錫蘭島に傳來せる「マハヤナ」の經典に著し最も精密に最も嚴格に多年の精進を傾注して譯せられたるものなれば現時の機に教界に唯一無二の好讀者を獲たるを疑はず近々讀者の机上に見へんとす

安部磯雄君著

理想の人

虚偽虚飾の貴族的道徳を痛罵して眞摯純朴の平民的道徳を鼓吹し高尚なる士君子と善良なる市民の眞面目な發輝したるもの即ち之れ

山路愛山君著

支那思想史

自家の研鑽は自家知る東洋の思想は東洋の人自ら解釋せざるべからず著者の此論を讀くや久し此書則ち之を實にするもの一也

浩々歌客君著

鷗心録

現代文壇に獨歩する遠親明親異彩ある雄麗高華の文章は收めて此の鷗心録にあり江湖讀書社會の多々益々味ふべき絶好文字也

堺 枯川君著

婦人問題

著者は現社會主義者中の辯々たるものにしてまた家庭問題婦人問題に關して此主義に立つ一家の見を有す抑もや如何なる論を有す

海老名正先生著

靈海新潮

著者が滿天下に號呼せる最大説教を解めたるものにして現代宗教上の實際問題に就ての解釋を試み其根本の要諦を提示せるもの也

高木壬太郎先生著

基督教安心論

著者が講壇及文壇より赤誠を披瀝したるものにして基督教の立場より安心の道を説きたる者人生問題に本書に依りて初めて解決せられん

清澤滿之先生著

懺悔録

白河派の領袖として多年辯論せる本山の陋習を打破せんか試みたる教壇上の勇士清澤先生の遺著也如何なる事なか懺悔せる!

浩々洞同人著

沈思録

讀者は熱湯を飲むが如き煩悶の中に本書を讀ひて其清涼の氣に醒れ以て宇宙の大靈の教済に接し安住の天地に入らんとはし給はずや

瀧 精一先生著

藝術雑話

何人にも理解し易く所謂應用美術の一書として美術家實爲家には勿論而も美術に興味を有する人々の必讀すべき書は本書也

上田 敏先生著

文藝講話

萬般の藝術に就きて臨時公にせられたる泰西思潮研究の講話也若實體なる態度を以て高遠精緻の說を述ぶる所他に其比なし

五十嵐 力先生譯

兒童の研究

人の性格の固定するは兒童教育の眼目也後來の教育の根本實に兒童教育にあり子を預れる教師人性の芽萌に美しき枝葉をなせしめんとして本書を讀め

建部遜吾先生著

靜觀餘錄

冷かなること水の如くにして透徹玉を欺き犀利なる觀察は事物の眞に徹底す靜觀餘錄の滋味滲流として流るゝ泉の如く抑せば即ち玲瓏の響あり

山路愛山君著

社會主義管見

此書は山路愛山先生が其主義を發表せられたる一大論文也語は平易に意は深く全卷假名付にして何人にも解し易からしむ

木下尚江君著

懺悔

戀に悩み死生に悩みたる著者が始めて人生の奥境に觸れて奮然新生活に邁進せんとする戦の宣言書也

高濱虚子君著

俳諧一口噺

俳諧一口噺は子規氏の隨筆に對して俳文の時代的變遷及進歩を示す虚子氏の文は細あり深あり其内面的觀察は獨特の長所なり

河東碧梧桐君著

俳句評釋

本書は猿蓑を評注せるもの初學者は勿論日に堂に上りたるものにも必讀の良參考書也

燕村先生真筆

俳諧三十六歌仙

俳諧三十六歌仙は俳聖燕村が古來の俳仙三十六人を撰んで其風采を描き俳仙が一代の名吟を以て之に發したる色刷本也

俳人芭蕉

子規翁手の形及風貌顔面用畫墨紙河東碧梧桐氏青館木版刷付古風映入製本

東京見物

田舎漢野郎十間後面を酒して東京を見物し配事を東京朝日新聞に掲げて文名忽ち文壇を壓す村柄漢が東京親御も如何

草鞋日記

伊藤銀月君著 五十三次 定価金五十六美 郵税金五

木下尚江君著

小靈か肉か

小説「火の柱」良人の自白に其革命的思想と熱烈如火の如き筆とを示したる著者が新生活に入る第一段階の小説は即ち之れ

小火の柱

革命の戦士社会主義の鼓吹者たる著者が新に採りたる小説の如何に新生活面を出せしか著者自身の告白を見よ

小良人の自白

著者が主義信仰の具體的説明たる本書は苦悶せる青年をして新曙光を仰ぐの希望に入らしむるもの也

小密航婦

中村春雨君著 人の心も霹靂の冷たき寒き世の中に乙女心の戀の花咲き出てん春にはあはて遂に枯れ行く身なるべきか嗚呼密航婦

中村春雨君著

無花果

無花果は在來の醜態なる若妻を脱し材を宗教に採り信と人情の衝突家庭と社会との衝突とより生ずる悲劇を温容なる女主人の樂化せしむるを描きし者

小舊山河

老ひたる父と病める妹と可憐の戀人とを發して國家の老に應じたる一士卒が再び故山に歸ればあはれ舊山河依然としてあれど我家の軒は傾き戀人は黄金の爲めに奪はれ老父は正に愛兒が捧ぐる一滴の水を待てり嗚呼如何に泣き行へべきか

大倉桃郎君著

小琵琶歌

小説琵琶歌は大阪朝日新聞懸賞當選の作なり結々として悲憤は長へに盡きし琵琶遊藝の調全篇の骨子となりて哀愁凄愴の極想正に人を魅し去らんとす

小不知火

小説「不知火」は往年「琵琶歌」を著はして京阪と東都の文壇及小説界に熱狂の子を狂せしめたる黒風白雨樓主人大倉桃郎氏の新作

石川半山君著

小世界的大競走

理學士秋月期依骨ある從者を隨へて歐洲線を取り津浦伯爵夫人と共に米國線を取り共に英京倫敦に向つて世界的大競走を試む其結着や如何

須藤南翠君著

小間一髮

南翠先生は文壇の元老也暫らく大阪にありしが再び中央文壇に現る元老の復活何を意味するものぞ希くば其驚らざる本書に問へ

菊池幽芳君著

小妙な男

妙な男は一篇の戯曲的構想より成り多少の喜劇趣味を帯べる奇警なる小説也單調なる文壇に異彩を放つ宜なる哉

佐野天聲君作

小不死の誓

脂粉の氣衰壯の致併せ兼ねて宛然一大横披の大パノラマの如し

小笠原白也君著

小嫁が淵

布装 定價金六十五 郵税八 美

柳川春葉君著

縁の糸

布装 定價金六十八 郵税八 美

徳田秋聲君著

奈落

布装 定價金七十八 郵税八 美

小山内八千代子著

新緑

全二冊 定價金六十 郵税八 美

水谷不倒君著

小岩窟穿

洋装 定價金四十五 郵税八 美

菊池幽芳君著

小七日間

洋装 定價金六十 郵税八 美

中村春雨君著

小雛鳩

洋装 定價金六十 郵税八 美

巖谷小波先生著

小喜劇七草

洋装 定價金八十 郵税十 美

トルストイ先生原作 内田魯庵君譯

イワンの馬鹿

最近下巻 定價金拾二 郵税二 美

中澤弘光君著

富士十二景

類高尙 定價金廿四 郵税十二 美

小林萬吾君著

風景水彩畫帖

繪畫六葉 定價金五十四 郵税四 美

薄田泣菫君著

白玉姫

布装 定價金八十八 郵税八 美

詩は調を民謡に採りて、今の所謂散文一致の新體を詩歌の無類の詩也

薄田泣菫君著

白羊宮

洋装 定價金拾五 郵税十 美

横瀬夜雨君著

二十八宿

四六列 定價金五十六 郵税六 美

オーキンミラー、野口米次郎兩君合著

劍と戀の日本

四六列 定價金四十六 郵税四 美

與謝野晶子著

乱れ髪

洋装 定價金三十五 郵税四 美

激烈なる情熱滿紙、有聲の男子をして、愕然其の言ふ所を失はしむ

與謝野晶子著

小

扇

本書に於て奔放抑ふへからざる著者の情熱は更に一段の高潔雄渾を加ふ
薄田泣菫君著
洋装 定價金三十五
郵税 四

暮

笛集

暮笛集は泣菫氏最初の詩集なり氏が青春の情熱は滿紙に溢る
與謝野鐵幹 與謝野晶子兩君合著
新式 定價金六
郵税 六

毒

草

詩壇に於ける作者夫妻の高名は今更に嚙々を要せじ
河井醉茗君著
新式 定價金五
郵税 六

塔

影

塔影は常に温顔を以て讀者の胸に接す
岩野泡鳴君著
少なくとも飽くこ
新式 定價金四十五
郵税 六

泡鳴詩集

久遠無窮の想を幽妙の調凡て獨創の靈感より來る於戲
其の曲や如何
四六判洋装 定價金六十
郵税 六

與謝野晶子著

夢の華

彼の『亂れ髪』の奇矯熱烈『舞姫』の豐麗典雅を喜びたるも
のは此の『夢の華』に於て女史が新機を迎へざる可
からず
布装 定價金八
郵税 八

黑

髮

こは萬期報中學世界其他諸雜誌に寄稿せる青年士女諸氏
の短歌中より、晶子女史の選抜を経たるものなり
新式 定價金五
郵税 六

戀

衣

新派歌壇の才媛として才藻共にその類を見ざる三女史が
近作の短歌と長歌とを集めたるもの
新式 定價金四
郵税 四

行く春

薄田泣菫君が第二の詩集を『行く春』と云ふ著者が熱血の
こぼれ出て、詩を作したるもの實に五十有餘篇
全紙二度摺 定價金四
郵税 四

高安月郊君著

寢覺草

高安月郊氏の近作數十篇を輯めたるもの史詩あり叙事詩
あり皆錦繡の作
郵税 八
一色醒川君著
四六判洋装 定價金十五
郵税 六

頌

榮

(都新聞評)著者の名は此の集によりて野者の耳に新たな
り詩風靈活にして其調暢麗あり云々
與謝野鐵幹君著
新式洋装 定價金三十五
郵税 四

むらさき

今や國詩革新の潮流頌る念なるに當り江湖の才人乞ふ本
書に依つて更に發明せらるゝあらば幸也
梁江堂編輯部編
新式洋装 定價金三十五
郵税 四

病間録批評集

中村春雨君著
定價金廿五
郵税 四

基督教物語

定價金拾二
郵税 貳

網島榮一郎 宇佐美英太郎兩君共著

見神論評

定價金六
郵税 八

吉水智海君著

支那佛教史

定價金六
郵税 八

小野藤太君著

眞言哲學

定價金六
郵税 八

蟠川龍夫君著

起信哲學

定價金六
郵税 八

小野玄妙君著

佛教年代考

定價金六
郵税 八

舟橋水哉君著

俱舍哲學

定價金六
郵税 八

伊藤銀月君著

豆相草鞋日記

銀月自書挿入
定價金五十錢
郵税六錢

『哲學雜誌』著者が草鞋脚絆に身を堅め尻端折つて靴と
編組傘をヒツかついて飛脚舟を舟出して三浦半島の三崎
城が島から葉山運子を通つて鎌倉に出て江の島から大磯
小田原熱海を経て蘆の湖から湯本に至る迄の間或は著者
の風景論も出づれば地質學的觀察もあるそふかと云ふと
二合の酒に酔を貰つた大膽な自己も表はれて来る頗る珍
妙な面白さが湧て出る附録としての『下駄日記』は那須野
温泉の案内記で前の『草鞋日記』とは一寸趣きを異にして
奥深く讀まれた真に無二の好案内記なり

伊藤銀月君著

山陽草鞋日記

銀月自書挿入
定價金五十錢
郵税六錢

風景と歴史と双絶なる山陽道の草鞋日記は舊に讀書界を
傾倒せしめし五十三次のそれに比して一段精采を加へ一段
著者の面目を發揮せり奇事異談綴出して應接し暇あらざ
る間に山陽道の風景及び住民の特色は犀利精透に描き出
ださる且つ山陽道には著者が崇拜する秀吉の傳記と大關
保ある土地多きを以て著者の筆は最も此一面に光焰を放
てり故に本書は或る意味に於て『山陽道風物論』たると共に
亦趣味深き『秀吉傳』たるなり

文學士高田梨雨著

科學空中戰爭

コロタイプ
定價四十錢
郵税六錢

大洋に浮ぶ艦艇の威も『空中の征服』で世界の流行器の
飛行機の後へに墮落しめられんとす將來の戦争及競争
は空中に開始されん獨逸のツェッペリン飛行機が一時
我十六里半の速力を以て能く六十時間の飛行に堪へたる
數回の證明は最早成功を疑ふ餘地なし本書は現今列國の
進歩程度を量り今後科學の力に由りて發達する範圍を豫
想し錯綜せる國際關係發明家英人偉人を以てし獨逸の空
中艦隊が膠州海を出發し日清空中艦隊の出發世界の波瀾
となる真に肉躍り血湧く爽絶の空中戦争記なり著者氣球
協會發起人なれば坊間の冒險小説及空中戦争と遜を異す
薄田泣菫先生編著

名家書翰集

定價金六十五錢
郵税金八錢

本書は廣く古今名家の書翰中より最も趣味ある珍品の少
を選擧せるものなれば真に赤採々なる名家の面目を知ら
んと欲する諸君は必ず讀ませざるべからざると共に又書
翰文の好模範たるを失はざるべし新時代の新書翰は如何
に草すべしか本書は幾多の趣味ある而して簡潔なる筆に
よりて之が實例を示せり男女學生の好伴として又家庭
の好寶鑑として廣く江湖に推獎せんとす

田邊和氣子刀自著

新編 女禮鑑

定價金五十錢
郵税金八錢

本書は和氣子刀自が實際的方面に重きを置き尤も懇篤忠
實に著はされたる著者淑女夫人は勿論禮儀の寶鑑として家
庭に備へざる可からず

實業俱樂部主筆藤田日東先生著

社會實験立身策

定價金五十錢
郵税金六錢

著者實験にして官途に在りて某大學に學び出ては合社商
店新聞社に就職し得たる實験を緯とし懇篤忠實に著はさ
れたるもの學校生活あり社會生活あり任用制度あり奉職
運動法あり就職比較あり實務の練習あり就職の勝策と榮
途の呼吸に至つては眞に無比青年社會に立たんとする結
針盤たる筈に其名に反かず

宮崎八百吉先生著

科學宇宙と人生

定價金六十錢
郵税金八錢

實驗的宇宙精神の觀念者たる著者が吾人の經驗に依りて
見解を實現し得べきかと首へる人生の最大疑問と科學者
の所謂宇宙の謎に對する解釋の新光を與へたり科學者宗敎
家必ず讀まざるべからず

碧瑠璃園著

乳人政岡

全定價各金七十五錢
郵税金各金八錢

世に千代萩を知らざる人あらざらん然れど本書の如く流
暢の文を以て遺憾なく實態を描きたるものはなし穩健な
る家庭趣味ある家庭は必ず愛讀せざるべからず

古愚莽主人著

家庭小説 ゆるさぬ關

定價金十二錢
郵税金二錢

『時事新報』ゆるさぬ關は時代小説と云ふよりも世話物
と云ふを適當とすべし單に舞臺を幕末時代に採り其時代
の人情風俗を其儘に出色したる者興味中心の小説として
確に成功せる作なり筋と變化に富み曲折多く叙事も手に
入つたものにて到底かけ出しの新作家などには及びもな
らぬはなれ業なり一身を賭して夫の故郷をかばひこれに
死闘する袖乃の貞節は讀む人をしめて思はず奮を蔽ふて泣
かむ近時異色の小説として洽く江湖に寫むるを得む

朝倉無聲先生著

日本小説年表

定價金八錢
郵税金八錢

本書は著者五十年の苦心搜索結果編纂せしものにして上
は平安朝物語より下は明治に至るまで採録する所の小説
大小一萬五千部之を大項細目に分類し又年代順に記載し
て解題註釋をも加へ巻末には詳密なる索引を添へたり

菊池幽芳先生著

小説 月

魄

全二冊 定価各金九十銭 郵税各金八銭

月魄前篇は誠此一大雄篇の月しろなり一輪の嬌嬌は後篇を以て某の面かなるめてたき光を此の主と投げけり此の月と此の魄との間に暗流は實に亂雲月を抱くの想あらしめ此の月魄は眞に滿天下の賞讃を得ずんば已まざるなり故尾崎紅葉山人遺稿

戀の山 賤

定価金五十銭 郵税金八銭

『報知新聞』の山賤は卷中同篇の外馬骨、江月の水、口惜きもの、文盲手引草並に戀の山賤を評せる幸田露伴氏の一文あり、全文手引草並に戀の山賤を評せる幸田露伴氏は紅葉山人が廿三歳の作にして所物語の乘りたる筆致を妙はここの書中に幾知すべく明治卅六年山人病不治の宣告に接し友人等十萬堂設立の事を請し紅葉全集編纂の際『戀の山賤』一書は版元不常の承諾を得たり紅葉全集編纂に洩れぬ此事親友石橋思齋、谷小波、雨氏最も遺憾となし今面之を出版するに至りたりといふ小波氏題句「捨くや葉を時雨のあとに遺き薄き」思出多き遺書なるべし薄田泣菫先生著

文落

葉

定価金八十五銭 郵税金六銭

一編を擧げて悉く郷土詩といふを得べく一編の風致唯だ舊都の落葉の音を聞くが如し氏の冥想は常に自然の核心

に浸透して温味感潤つ乍ら相儲けり之を願はすの文運然として其の想に伴ふ詠し來れば三千年の寂ある京都は生涯の一歩を讀むが如し

内田魯庵先生著 小説 イカモノ

定価金八十五銭 郵税金十五銭

イカモノ、眞物歟、抑も狗頭を掲げて羊肉を售るもの乎、イカモノ一語當代の文藝管能先生の近作、創作小説四編を収む、文壇流行以外に超然たる著者の體裁を窺ひ、眞に人生の神秘なる語を味はんとせば須く本書に見よ

佐野天聲先生著

本脚 大 農

定価金五十銭 郵税金八銭

瀨田夏葉女史著 露園チエホフ傑作集

定価金九十五銭 郵税金八銭

露園文學に通じざるは吾文壇最近の傾向を觀取する能はずチエホフは露園文學の冠冕たるのみならず實に東西の文學に比類を絶す夏葉女史は故紅葉門下の秀才古今士露園に精通せるは故二葉、氏と共にオーソリテイイオスキーの『露園』は世界の賞讃を博せし傑作全篇悉く必然たる珠玉の文字最近文學の潮流に相さんとする諸君は必ず熟讀甘食せざるべからず

田山花袋先生著

日本新漫遊案内

明細地圖數葉挿入 定価金十二銭 郵税金二銭

本書は旅行家として名ある田山花袋氏の編したるものにして在來の案内記とは其内容を異にし交通線路に由りて其附近の地理的連絡を明らかにしたるを以て山川名勝を初め海水浴温泉湯等に至る迄指掌の間にあるの思ひあるべし

縁園叢書第一卷

木村長門守

定価金七十銭 郵税金十銭

長門守の名は風流武者を以て開ゆ農家の末路を擲して大坂陣の活躍は當時雲の如かりし名武士を聚めて復興を企てし鋭氣如何に

長谷川二葉亭四迷著

小説 草

定価金四十二銭 郵税金十二銭

著者露園文學の淵奥を研究すべく露園に在り遺般病癡の癡ふところとなり惜むべし此北歐文學家のオーソリテイは遊けり本傳は氏が生前最近の著にして露園文學の粹を探りたるもの又傑作中の傑作若し夫れを細かかんか感味渺然として願はるるを覺ゆ抱負ある偉大なる文學を知らんとする諸君は此一大雄篇に依らざるべからず

露園文藝アンソング、チエホフ著 日本小山内薫譯 長 決

定価金八圓 郵税金八圓

本書は露園文藝チエホフの唯一の長篇でまた唯一の傑作である否世界文壇出色の一大雄篇である彼の深刻な北歐の文學に親まんとする諸君はまづ此の決闘を讀みなすべからず

伊藤銀月先生著

最新忍術と妖術

定価金廿五銭 郵税金四銭

是れ銀月が満腹の術氣と種氣とを傾け盡したる、馬鹿々々しきこと御話にならぬ悪著也、讀して之を讀むべからず、たゞ須らく買ふて以て黒糖となし、白湯に和して之を服用すべし、爾らば則ち、氣に化し、蝦蟇に化し、雲に乗り、風を駕するも、能く自由自在なるに至り、面白くたまらぬことを得ん(銀月談)

遊柿園先生著

コンタリニ物語

近泰 四的 美 刊

著者は抱負氣概力ある大家として、治く人の知る處此想此雄偉な振て英國有名なる音楽家の東西無比なる學識あるの如きライフと規模の巧妙にして殊に歐羅巴のクラトリヤ女王の捧愛を得、微風道かに穿聲を送り其高趣風韻清致を極むること未だ是れに過ぐるものあるを聞かず、これ天下風流士女の錦心を動かすべきものコンタリニ物語は眞に滿天下の賞讃を拍せずむべきまざるなり

高橋五郎先生著

心靈萬能論

定價金九十錢
郵税金八錢

方今天下萬國競講究利用厚生之道之に屬望し幽明交通の法之に展開し靈魂滅否の疑之に解決す交霊術降神術見神術幽靈攝影術水金發見術テラマルニング、プラシメント狐狗狸催眠術色覺術等種種に詳論す現代の大問題たる千里眼亦本書に依りて始めて氷釋せらる

高橋五郎先生著

新哲學の曙光

定價金壹圓肆拾錢
郵税金十二錢

本書は東西古今神人聖哲の圓頓大衆的知見を神秘的に通觀し神妙殊絶なる直覺哲學を創發し以て此の大福音を宣傳するの先聲なり心靈萬能論と相俟つて思想界及び宗教界を革新するや偉大なり

伊藤銀月君著

日本風景新論

定價金壹圓
郵税金十錢

何に依りて日本の風景は絶美なるを得たるか何が故に日本の風景を絶美なりとなすかを著者獨特の詩想に科學的智識を融合せしめ敢て日本の風景を問題となして斬新奇抜なる議論を試む理趣情致兼れ至れるもの本書を指て他に求むべからざる也

水野葉舟君著

愛の書簡

定價金六十錢
郵税金八錢

情愛を主としたる相互の書信に擬し著者の創作と名家の手紙と之れに著者が書簡に對する見解を附しその趣味を鼓吹すると共に近代人の現實生活に於ける心情の聲を流露せしめたるもの本書也

水野葉舟君著

日記文

定價金六十錢
郵税金八錢

日記は吾人生存の確實なる足跡にして尊貴なる人類の生活史也而して新興藝術の根本意義も之を吾等が凡々の生活に求めずして又他に何かあらん著者いまこの見地に立ち日記の趣味と作法とを説き以て範を示す事願る懇切

水野葉舟君著

小品作法

定價金六十錢
郵税金八錢

日記は個人の内生活史にして書簡は社會的交渉の記録なり而して小品は更に進んで吾等趣味の世界に於ける最初級の藝術也「書簡」と「日記」とに此書を加へて新機式文範の完備を期せんとす著者が獨壇場を本書に於て求め

文學博士井上哲次郎先生著
文學士堀謙徳先生補

釋迦牟尼傳

定價金貳圓肆拾錢
郵税金十六錢

釋迦の史傳として尤も完全無缺なる又考證該博なるものは本書也好評噴々として十九版數萬部を盡して原版廢滅せるに於り今や大増補を加へて彪然五百餘頁の大冊となるオルデンベルグ氏「佛陀」と相俟つて斯界を飾る二大名著と言ふも敢て過言にはあらざるなり

文學士大町桂月 佐伯常廣兩君合著

誤用便覽

定價金壹圓肆拾錢
郵税金十二錢

本書は徒らなる穿鑿や專門的の論議をなさずと雖も日常人の氣づかざる誤用(國字、用語、發音、字源文法等の)を辭書的に列挙し別に「文法の誤」を附し又桂月先生の文三篇、藤外先生の文一篇を附し萬人必讀の辭典を成せり

三輪田眞佐子著宮中御歌所寄人坂正臣書

女子文のかゞみ

定價金六十錢
郵税金六錢

坂正臣先生の書は世既に定評あり本書は先生の書に加ふるに文章は現代女子學界の明星たる三輪田女史の消息なり採りて學べば皎たる光臨たる耀は直ちに諸子か机邊に送るべし

故宮中御歌所寄人中郵秋香先生著
學習院文學部教授小野鷲堂先生書

新式書簡文

定價金五十五錢
郵税金六錢

女子大學校教授鹽井雨江先生著
學習院女子部教授小野鷲堂先生書

新體女子手紙文

定價金五十五錢
郵税金六錢

書簡文は中郵秋香先生が老練の筆になり手紙文は鹽井雨江先生が幽雅なる美文にもせられたるを筆硯界の泰山北斗たる小野鷲堂先生が大字に書せられたるもの紳士淑女の採りて以て範とすべきの書也

文學士 横山健堂君著

文學東海道五十三次

定價金壹圓肆拾錢
郵税金十二錢

繪の穂先に富士を戴いた昔から演名の海に長蛇の轟々と駭る今に至るまで駢々相つないで東海道五十三次ほど、歴史と自然の詩趣に富むものはない、著者文學に對して既に爛々の眼あり、文に於ては黒頭巾の名を以て、健堂の名を以て天下に知られてゐる、此の想と筆とを編つて此絶好詩題を舒する、其内容の如きは嗚々するを要せぬ所である、

小島鳥水君著

日本アルプス

定價金貳圓
郵税金十二錢

日本アルプスは高山深谷白雪森林等の大自然に富み最も複雑なる構造と高調の色彩を有すれ共古來人跡殆んど到らず地理文學繪畫より削除せられたる境域也本書は著者が數年來この地を旅行して齎らし來りたる紀行文及び研究録也篇中挿入せる六名家のスケッチ寫眞版コロタイプ三色版木版等亦絶世の珍品

伊藤銀月君著

草鞋日記

定價金五十錢
郵税金八錢

奥羽及北海道 奥羽山河由來名勝に富む松島の優婉雄鹿の豪宕は就中傑出せるものにして著者此の二に對して前人未發の新觀察新議論あり進んで北海道の自然の雄大怪奇に接するに及びては筆に風霜を挿みて鬼神を泣かしめんとす

伊藤銀月君著

日本名勝史蹟

全定價金八十錢
郵税金各八錢

著者既に一特色ある史蹟家として天下を風靡し加之風景を詳臨するに於て凡ての文豪を舊式なりとなすの抱負あり而も其從來の著書を見るに未だ本書の如く歴史地理兩面の長所を同時に發揮せるものなし正に是稀有の珍書と云ふべきもの也

大町桂月先生譯評

新文章軌範

定價金七十五錢
郵税金八錢

文章軌範が千古の名文としてわが文章道に於て殆ど經典となれるや久し本書は桂月先生が時代の要求に鑑みて之を邦文に譯したるものにして且つ其各文末に先生の評を加ふ發拔なる觀察と高邁なる識見と共に文章の眞髓を闡明して潤澤更に一層を加へたり

大町桂月先生譯評

新續文章軌範

定價金七十五錢
郵税金八錢

大好評の下に發賣忽ち數版を重ねたる新續文章軌範の續篇なり文章益々蕪境に入つて更に一段の光彩を放つ

鹿樵富塚徳行 河徳淳兩君合著

袖唐詩選講話

上卷定價金六十錢
下卷定價金七十錢
郵税金各八錢

正確なる傍訓 平易なる行文とは、本書を語るの辭也、加之每首解説の下に參考として古今名家の漢詩和歌俳句其他を附記し以て詩的趣味の了解に努めたるは此種の著述に於て嚆矢とする所正に漢文註釋書の新形式を開きたるもの也

334

68



